

経済思想史通史の方法的問題

—21 世紀初頭の段階における通史像

石井信之（青山学院大学）

「第二目録」
第三会場

I. 問題の所在：日本における最近の通史構成上の問題点

広義の経済思想史（経済学史を含む）を通史的に構成していく場合、何を判断基準（メルクマール）にして論理的に構成していくのかについて、日本の最近の通史的著作は無自覚的だと思われる。それらの例として、以下の二著作があげられよう。即ち、金子光男編著『経済思想の源流』八千代出版、2008、野沢敏治『経済学史と対話する』御茶の水書房、2008、である。これら二著作は、通史の構成軸を論じる個所を設けておらず、網羅性・体系性・首尾一貫性から多くの問題点をもっている。輸入加工業的な日本の西欧経済思想史・西欧経済学史という問題意識をもつならば、当然、選択した思想家・学者・学派について何故そうなっているのかの通史軸について具体的に述べた章を設けた上で本論を展開すべきであつたらう。尚、経済思想史・経済学史の歴史的形成については、つぎの拙稿を参照されたい。（「経済学史の成立と展開—通史文献の歴史的動向—」『青山経済論集』第 35 巻第 1 号、1983. 7. 当日配布予定）。そこで、以下、最近刊行された欧米（英・米・仏）の定評ある代表的通史の比較検討から 21 世紀初頭段階における望むべき通史像をうかびあがらせてみよう。

II. 方法論的自覚に基づく通史軸の構築をめぐる：代表的類型の比較検討

これまで版を重ねてきた代表的通史と 21 世紀にはいつて刊行され報告者に入手可能であった通史には、現在時点で以下のものがあげられる。（著者名（刊行年）の形で刊行年順に列挙するので、本文末尾の〈刊行年順通史文献〉と照合されたい。）

ブルー（2000, 第 6 版）、エトネル（2000）、リマ（2001, 第 6 版）、バックハウス（2002）、メデマ&サミュエルズ編（2003）、ヴァッジ&グレーネヴェーゲン（2003）、ロンカッリア（2005）、スクレパンティ&ザマーニ（2005, 第 2 版）、ドウルプラス（2007, 第 2 版）、エークランド&エベール（2007, 第 5 版）、サンデルリン、トラウトヴァイン&ヴントラーク（2008, 第 2 版）、アンリ（2009）、リマ（2009, 第 7 版）

これら 13 著作の詳細目次を以下に示して構成上の類似点・相違点を比較してみよう。

- ブルー（2000, 第6版）目次（拙稿「経済思想史通史像への模索—サンデリン, トラウトヴァイン&ヴントラーク共著『簡略経済思想史』（2008）をめぐって—」『青山経済論集』第60巻第4号, 2009. 3, 82～83頁参照。当日配布予定。以下も拙稿からの引用は同じ）。
- エトネル（2000）目次（当日配布資料参照）。
- リマ（2001, 第6版）目次（拙稿, 83～85頁）。
- バックハウス（2002）目次（拙稿, 85～87頁）。
- メデマ&サミュエルズ編（2003）目次（拙稿, 87～88頁）。
- ヴァッジ&グレーネヴェーゲン（2003）目次（拙稿, 89～90頁）。
- ロンカッリア（2005）目次（拙稿, 90～92頁）。
- スクレパンティ&ザマーニ（2005, 第2版）目次（拙稿, 92～93頁）。
- ドゥルプラス（2007, 第2版）目次（当日配布資料参照）。
- エークランド&エバール（2007, 第5版）目次（拙稿, 93～94頁）。
- サンデリン, トラウトヴァイン&ヴントラーク（2008, 第2版）目次（拙稿, 105～106頁）。
- アンリ（2009）目次（当日配布資料参照）。
- リマ（2009, 第7版）目次（当日配布資料参照）。

以上の13著作を、報告者がこれまでの通史執筆方法論から見出した4つの軸に当てはめると以下のように整理できるであろう。それぞれのアプローチや立場の後にそれらの定義づけを挿入しておく。

- (1) 相対主義的アプローチ（各時代、各国、各地域の特定の社会経済問題に対応して、経済思想や経済学が成立したとする立場）—ブルー（2006, 第6版）。
- (2) 絶対主義的アプローチ（現在の経済学（その代表は新古典派主流のミクロエコノミクス及びマクロエコノミクスの理論）が達成している分析水準から過去の理論・学説の長短を批判的に評価する立場）—ドゥルプラス（2007, 第2版）, エークランド&エバール（2007, 第5版）。
- (3) 相対主義的アプローチと絶対主義的アプローチの補完的使用（(1), (2)を、適宜、時代、国、地域、問題等々に応じて併用する立場）—エトネル（2000）, バックハウス（2002）, スクレパンティ&ザマーニ（2005, 第2版）, サンデリン, トラウトヴァイン&ヴントラーク（2008, 第2版）, リマ（2001, 第6版, 2009, 第7版）。
- (4) 新古典派主流とともに異端的諸潮流も重視する立場（学史・思想史における連続的・累積的発

展を軸に据えているが、各思想・各学説間の競合・断絶関係、そして併存を認める方法論的多元主義 (methodological pluralism) の立場 —メデマ&サミュエルズ編 (2003) , ヴァッジ&グレーネヴェーゲン (2003) , ロンカッリア (2005)。

21 世紀初頭の通史執筆の傾向としては、以上の分類が示すように、相対主義的アプローチと絶対主義的アプローチの補完的使用、並びに、方法論的多元主義の採用ということがあげられよう。特に、方法論的多元主義の有効性についてはシーラ・ダウ (Sheila Dow) の見解が参考になる。(Sheila Dow, “History of thought, methodology, and pluralism” , in Jack Reardon(ed.), *The Handbook of Pluralist Economic Education*, London and New York: Routledge, pp.43~53.)。彼女によれば、数学的・演繹的論理による分析を合理的個人行為と結びつける論理実証主義的・一元論的伝統的経済学 (新古典派主流のことであろう: 報告者) は思想史と方法論によって打破できるのである。主流派経済学の内部における多元主義の増加が現実が生じており、経済思想史を研究することが多元主義を理解するための理想的な方法なのである。(Ibid., pp.44~45, 48.) しかし、我々には方法論的多元主義を更に根底で支えている人間観・世界観としての経済哲学 (economic philosophy) あるいは経済的推論 (economic reasoning) という観点に立って通史を構築していくことが考えられる。最後に、この点を踏まえた通史像に触れておこう。

III. 通史軸のあり方をめぐって: 21 世紀初頭における経済哲学的問題意義に基づく通史構築に向けて

Big Three in Political Economy/Economics として一般に認められている 18 世紀のスミス (Adam Smith, 1723~90)、19 世紀のマルクス (Karl Heinrich Marx, 1818~83)、20 世紀のケインズ (John Maynard Keynes, 1883~1946) に共通するのは、「哲学→媒介項→経済学」という形成過程である。即ち、いずれも出発点は根底的・基礎的な哲学的立場である。(スミスにおける自然法哲学、マルクスにおけるヘーゲル哲学批判、ケインズにおける G. E. ムーア哲学)。それらが媒介項 (スミスにおける倫理学・法学、マルクスにおけるフォイエエルバッハ哲学に基づく史的唯物論、ケインズにおけるケンブリッジ・サーカスでの議論) を経て、各々の経済思想に結実したといえよう。我々には、このような視角 (経済思想の根底にあるそれぞれの哲学の比較的・批判的検証) に立脚した通史こそが、今、必要とされているように思われる。II. で述べた(1)(2)(3)(4)のアプローチも包括的通史の基礎として不可欠であるが、経済的推論 (economic reasoning: Karl Priblam の造語) の比較検討に基づく経済哲学史 (history of economic philosophy) の復権が求められよう。ここで参考になるのが左右田喜一郎、杉村広蔵、武藤光朗、塩野谷祐一等の諸著作でありプリプラムの著作 (本文末の<刊行年順通史

文献>参照)である。

以下では塩野谷祐一著作による独自の経済学史像とプリブラムの著作、更に、これらを補完すると思われるパールマン論文 (Mark Perlman, “The History of Ideas and Economics”, in *A Companion to the History of Economic Thought*, edited by W. J. Samuels, J. F. Biddle & J. B. Davis, Oxford: Blackwell Publishing Ltd., 2003, pp.634~654) を紹介し、本報告の結びとしたい。

塩野谷祐一著作による構造的・有機的経済学史通史像ともいえる定義づけは難解なものであるが、それを示す箇所を塩野谷氏の著述から以下に4つ示してみよう。

- 「パノラマ=シナリオ・モデル」による歴史の「全体的再構成」とは、経済学の年代記風の通史を意味するのではない。そのようなものはヘーゲルの「痴呆の画廊」に他ならない。歴史の「全体的再構成」は、あたかも理論家が対象としての現実をモデル化すると同じように、対象としての諸学説を材料として、経済的経験の全体像をモデル化することである。そこには一貫したシナリオがなくてはならない。(塩野谷祐一『経済哲学原理—解釈学的接近』東京大学出版会, 2009, 363頁。)
- シュンペーターの経済学史のシナリオの範囲は、経済学の3分類(経済静学・経済動学・経済社会学)を含む。事実、彼の『経済分析の歴史』はこれらの3種の経済学の発展を追跡することから成り立っている。(同上書, 367頁)
- 経済学について解釈学が展開される場合は、経済学の歴史である。経済学史が解釈学の具体的な場となるためには、経済学の歴史が「パノラマ=シナリオ・モデル」として構築されなければならない。その考え方は、個々の経済学説はそれ自身で完結したものではなく、経済知の一契機にすぎず、「全体知」(パノラマ)と「体系性」(シナリオ)を必要とするということである。このモデルは、経済知に関する「存在被投」と「存在投企」との関係を経済的時間の文脈にそくして定型化したものである。学説の「歴史的再構成・合理的再構成・全体的再構成」は、それぞれ「過去・現在・将来」の時間軸に即応した「存在了解」に他ならない。(同上著, 435頁)
- 経済的知の世界における「投企と被投」との関係を現実に示すものは経済学の歴史である。経済学史こそは、経済の解釈学が実践される舞台である。私は『経済哲学原理』の中で、学史研究のための「パノラマ=シナリオ・モデル」という概念を提起したが、これは、学史研究が「被投」の中で骨董趣味や記念碑的信仰に墮するのではなく、より高次の知の構築のための自覚的「投企」の試みとなるために必要な基礎である。シュンペーターの経済学史は、経済の静態理論の完成に続いて、動態理論および経済社会学(さらには総合的社会科学)へとフロンティアが拡大するさまを存在投企したものである。彼が学史研究において卓絶した地位を占めていることも、知の解釈学の実践者としてのユニークさの証左であると思われる。(塩野谷祐一「経済哲学の構築—『経

『経済哲学原理—解釈学的接近』の刊行に際して『UP』第39巻第1号、東京大学出版会、2010年1月、12頁。）

塩野谷著『経済哲学原理』における「経済哲学史」ともいえるものは、以上の引用が示すように、ハイデッガー (Martin Heidegger, 1889~1976) 哲学の「存在被投・存在投企」概念に基づく「歴史的再構成・合理的再構成・全体的再構成」を目指し、「パノラマ=シナリオ・モデル」として構築されるところとしている。その具体的な形態はシュンペーターによる「経済静学・経済動学・経済社会学・総合的社会科学」を構成要素とする体系的通史である。しかし、問題は、これまでの通史に登場してきた思想家・学者・学説・理論などがどのように位置づけられるのかが全く不分明な点である。塩野谷著作中に断片的には、そのことについての言及はみられるが、現在のところ、推測するほかないのであり、この点についての塩野谷氏の新たな展開を望むものである。

以上の塩野谷著述のイメージするところとは食い違う点が多々みられるが、経済思想史（経済学史も含む）の哲学原理的展開の基礎を与えてくれるのがプリブラム(1983)とパールマン前掲論文(2003)である。最後にこれら2人の論点に言及して本報告をまとめてみたい。(この最後の論点については、プリブラム著の目次の提示と要約、更に、パールマン論文の要約を行なう予定である。)

<刊行年順通史文献>

- プリブラム (1983) : Karl Pribram, *A History of Economic Reasoning* (Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1983, li+765pp.)
- ブルー (2000, 第6版) : Stanley L. Brue, *The History of Economic Thought* (Fort Worth, Tex. : The Dryden Press, 2000, 6th edn., xiv+568pp.)
- エトネル (2000) : François Etner, *Histoire de la Pensée Économique* (Paris: Ed. Economica, 2000, XIII+369pp.)
- リマ (2001, 第6版) : Ingrid Hahne Rima, *Development of Economic Analysis* (London and New York: Routledge, 2000, 6th ed., xiv+585pp.)
- バックハウス (2002) : Roger E. Backhouse, *The Penguin History of Economics* (London: Penguin Books Ltd., X+369pp.)
- メデマ&サミュエルズ編 (2003) : Steven G. Medema & Warren J. Samuels (eds.), *The History of Economic Thought: A Reader* (London: Routledge, 2003, xii+668pp.)
- ヴァッジ&グレーネヴェーゲン (2003) : Gianni Vaggi & Peter Groenewegen, *A Concise History of Economic Thought: From Mercantilism to Monetarism* (Houndmills, Basingstoke,

Hampshire and New York, N.Y.: Palgrave Macmillan, 2003,xvi+339pp.)

- ロンカッリア (2005) :Alessandro Roncaglia, *The Wealth of Ideas: A History of Economic Thought* (Cambridge, UK · New York, USA: Cambridge University Press, xiv+582pp.)
- スクレパンティ&ザマーニ (2005, 第2版) :Ernesto Screpanti & Stefano Zamagni, *An Outline of the History of Economic Thought* (Oxford, Ox. UK · New York, USA: Oxford University Press, 2005, 2nd ed., xviii+559pp.)
- ドゥルプラス (2007, 第2版) :Ghislain Deleplace, *Histoire de la Pensée Économique du «Royaume Agricole» de Quesnay au «Monde à la Arrow-Debreu»*, (Paris: Dunod, 2007, 2e édition, Nouvelle Présentation, 2009, xxv+539pp.)
- エークランド&エバール (2007, 第5版) :Robert B. Ekelund Jr.& Robert F. Hébert, *A History of Economic Theory and Method* (Long Grove, Illinois: Waveland Press, Inc.,2007,5th ed.,xvii+637pp.)
- サンデルリン, トラウトヴァイン&ヴントラーク (2008, 第2版) :Bo Sandelin, Hans-Michael Trautwein & Richard Wundrak, *A Short History of Economic Thought* (London · New York: Routledge: Taylor & Francis Group, 2nd ed.,2008,ix+118pp.)
- アンリ (2009) :Gérard-Marie Henry, *Histoire de la Pensée Économique* (Paris: Armand Colin, 2009, 365pp.)
- リマ (2009, 第7版) :Ingrid Hahne Rima, *Development of Economic Analysis* (London and New York: Routledge: Taylor & Francis Group, 7th ed., xii+606pp.)